

# 演奏会のプログラム構成に関する一考察

## — 4つの教育的アプローチによる —

木下由香

(2013年2月1日受理)

### 1. はじめに

現代のコンサート形態は多様である。かつて、クラシック音楽と言えば、堅苦しい、高価、難しい、といった印象があったが、演奏者と聴衆との距離が身近に感じられるレクチャーコンサートやトークコンサートといった企画物、広く大衆をターゲットにした「ラ・フォル・ジュルネ」など音楽祭的な催しが浸透してきている。今回、筆者は、ピアニストとしてまた教員として、平成24年6月15日(金)に行った福井新聞社主催による「第248回 ちょっと素敵なお音楽会 木下由香ピアノリサイタル～ハンガリーを懐かしんで～」について、自らのプロデュース記録に基づき、演奏会におけるプログラム構成について考えを述べたい。

### 2. 方法

「ラ・フォル・ジュルネ」を創始したルネ・マルタンは、音楽プロデューサーとして音楽祭全体の

プログラムを全て自分で決めている。その際、自分の知っている曲を選び、その曲をある人が聴いたときに、「どうやって受け取るのか」ということを常に想像し、また、「音楽的な道り」というものも、いくつも用意している、と述べている。例えば、この選曲は朝のため、この選曲は昼のため、この選曲は夜のため、というような道りである。あるいは、ある曲を聴く。すると、次はこういう曲が必要になってくるだろうな、ということを考える。また、プログラム構成においては、原曲はもちろん、編曲版もあるなど、音楽に精通した方にも満足してもらえるような内容が必要だと述べている<sup>1)</sup>。

今回のコンサートは、休憩時にデザートとドリンクをお楽しみいただける設定となっていることにヒントを得て、前半のプログラムはコース料理に見立てた「音楽的な道り」を用意した。

さらに、音楽の授業における楽しさについて西園芳信が認識論の視点から捉えまとめた、4つの教育的アプローチを取り入れた。

### 4つの教育的アプローチ<sup>2)</sup>

①	「かたち」形式的側面	音楽を形づくっている構成要素（音色・リズム・旋律・和音を含む音と音のかかわり合い・形式・速度・強弱）と構造（構成要素の関連）
②	「なかみ」内容的側面	音楽の諸要素と構造から生み出される気分・曲想・雰囲気・豊かさ等
③	「背景」文化的側面	かたち・なかみから形づくられている個々の音楽の生み出された風土・文化・歴史等
④	「技能」技能的側面	かたち・なかみ・背景からなる音楽を実際に表現として具現化するための読譜や声による技能、楽器の技能、合唱や合奏の技能

### 3. 内 容

#### (1) プログラム

ハイドン／ピアノソナタ第38番 へ長調 Hob. XVI:23  
 メンデルスゾーン／3つの練習曲 Op.104b  
 メンデルスゾーン／ロンド・カプリチオーソ ホ長調 Op.14  
 ラヴェル／ラ・ヴァルス  
 休憩  
 コダーイ／マロシュセーク舞曲  
 バルトーク／15のハンガリー農民歌  
 リスト／巡礼の年第2年補遺「ヴェネツィアとナポリ」よりタランテラ

#### ① 「かたち」形式的側面のアプローチ

ピアノ独奏版とオーケストラ版の違いについて触れる。

#### ② 「なかみ」内容的側面のアプローチ

コース料理にこれらの曲をあてはめた理由について述べる。

まず、「前菜」にあてはめたハイドンのソナタは、軽やかな雰囲気が曲全体を通して続く。前菜の役目は「食欲を駆り立てること」であり、そのため量が少ない割に、色鮮やかなものが出てくる。ハイドンのソナタも、音数が少ない中に魅力的なテーマが次から次へと現れ、落ち着くことのない活発な印象を与える。

スープには、メンデルスゾーンの練習曲。速いアルペジオの пассаージュは、まるでスープが喉を流れるようである。

魚料理は、メンデルスゾーンのロンド・カプリチオーソ。淡白な白身魚を多種類のソースで楽し

むような曲である。

肉料理は、ラヴェルである。曲は短い、大人の旨味が凝縮されたボリュームのある曲である。

休憩に、デザートとコーヒーを挟んでリラックス。後半は、2次会風に盛り上がる曲を並べた。

#### ③ 「背景」文化的側面のアプローチ

古典からロマン派、近現代へ時代の変遷について触れる。また、当時使用されたピアノと現代のピアノの違いについて触れる。

#### ④ 「技能」技能的側面のアプローチ

ハイドンのようなシンプルな作りの曲を整然と演奏すること。メンデルスゾーンの流れるような пассаージュを情緒豊かに演奏すること。ラヴェルの幻想的かつダイナミックな世界を表現すること。ハンガリーものの躍動感溢れる情熱を表現すること。

#### 実際の進行

	コース料理	内 容	アプローチ法
演奏	前菜	ハイドン／ピアノソナタ (10分)	④「技能」
MC		<p>本日はこのような貴重な機会を与えていただき心より感謝申し上げます。</p> <p>このコンサートは、休憩時にデザートとドリンクをお楽しみいただける趣向になっておりまして、前半のプログラムはコース料理に見立てて選曲致しました。</p> <p>コース料理とは、前菜、スープ、魚料理、肉料理、デザートであります。</p>	②「なかみ」

MC		また欲張って、古典派、ロマン派、近現代と音楽様式の時代変遷を追ってみました。最初に演奏したハイドンの時代に使用された楽器はクラヴィコードと言って、こちらにある現代のピアノとは造りが違っていました。鍵盤の数も少なかったでずし、強弱の幅もなく、弦を弾くような音色を出していました。そして、ロマン派の時代に現代のピアノの原型が完成し、表現の幅がとて豊かになってきました。ピアノという楽器の変遷についても感じ取っていただけたらと思います。	③「背景」
MC		休憩でデザートをお楽しみいただいた後は、2次会の雰囲気です留学したハンガリーを代表する作曲家3名の作品を取り上げることにしました。民族色が濃い舞曲ものです。ハンガリーの溢れる情熱をお届けいたします。それでは、次はスープになります。	②「なかみ」
演奏	スープ	メンデルスゾーン／3つの練習曲 (8分)	④「技能」
演奏	魚料理	メンデルスゾーン／ロンド・カプリチオーソ (8分)	④「技能」
MC		ラヴェルのラ・ヴァルスは、本来管弦楽作品として作曲されましたが、その後、ピアノ独奏用に編曲されています。後半で演奏するコダーイのマロシュセーク舞曲は、元々ピアノ独奏用として書かれ、その後、管弦楽版が発表されました。ピアノ独奏版とオーケストラ版との違いについて、私が考えていることは、オーケストラ版は実際に様々な楽器が存在し、多彩な音色を奏でることができるという意味で、『カラーの世界』、逆に、ピアノ独奏版は『モノクロの世界』であるということです。『モノクロの世界』は、『カラーの世界』に比べてネガティブなイメージを持たれるかもしれません。しかし、私は、『モノクロの世界』は『カラーの世界』に比べて、曲の輪郭がより鮮明になり、いわば曲の構造がくっきりと浮かび上がると捉えています。今日は、オーケストラ版のような色彩感を目指しながら、曲を明確に表現することに集中して演奏したいと思います。	①「かたち」
演奏	肉料理	ラヴェル／ラ・ヴァルス (13分)	④「技能」
休憩	デザート&コーヒー	休憩 (20分)	①「かたち」
MC		さて、後半はハンガリーを代表する3名の作曲家、コダーイ、バルトーク、リストの作品を演奏します。コダーイ、バルトークは自国の民族音楽採集をおこなうためにハンガリー全土を廻りました。そこで、得られた口承による民謡を楽譜にし、そのフレーズに和声を加えてとてもファンタジックな曲を書いています。バルトークの15の農民歌を演奏するにあたり、ひとつひとつの民謡の歌詞を訳してみました。人々の日常を素朴なメロディーに乗せて歌われたものもあれば、哀愁に満ちた内容のものなど様々です。また、民族性のある舞曲ものが多いのが特徴です。軽快なリズムに乗り、速度を速めて終結する様子を見事に表しています。実際、ハンガリーの民族ダンスを見ると良く理解できることでしょう。	③「背景」
演奏	2次会	コダーイ／マロシュセーク舞曲 (11分) バルトーク／15のハンガリー農民歌 (12分) リスト／タランテラ (9分)	④「技能」
MC		本日は、最後までお聴き下さいましてありがとうございます。最後に、東日本大震災でお亡くなりになった方々のご冥福をお祈りし、シューベルトが作曲した「アヴェ・マリア」をリストが編曲したものを演奏します。リストはトランスクリプションをおこなったことが最も大きな業績とも言われています。これは、当時の演奏会において、作曲家兼演奏家以外の作品を、ピアノ作品に限らずオーケストラや室内楽のものをピアノ用に編曲、改編して紹介したという意味で、大変珍しく貴重なことでした。多くの作品を聴衆に紹介することで、大変意義あることでした。それでは、今日は本当にありがとうございました。	③「背景」
演奏	アンコール	シューベルト＝リスト／アヴェ・マリア (5分)	④「技能」

#### 4. おわりに

当日のコンサートには、200名のお客様にお越しいただいた。その中から以下のような感想をいただいた。

- 「あっという間の2時間でした。」(20代・女性)  
 「今日のお料理は、お腹いっぱいになりました。とても贅沢な内容で楽しめました。」(30代・女性)  
 「プログラムにあった写真などを見たり、留学生活のエピソードを聞いたりして、由香さんのハンガリーを懐かしむ気持ちが伝わってきました。」(40代・女性)  
 「ピアノのことは詳しくありませんが、コース料理の話があらかじめあったおかげで、初めて聴く曲でもイメージが掴みやすく聴きやすかったです。」(20代・女性)  
 「『カラーの世界』と『モノクロの世界』の話は、非常に興味深くなるほどと思いました。」(30代・男性)  
 「普段、演奏家が何を考えて演奏しているのか聞く機会があまりないので、今日は話が聞いて良かったです。」(40代・男性)  
 「『2次会』のコメントが面白かったです。」(40代・男性)  
 「ハイドンが良かった。」(60代・男性)  
 「どの曲もとても素晴らしかったですが、特に後半のハンガリーの作曲家、コダーイ・バルトーク・リストの作品は、もう音楽が自由に歌われていて、とても自然でかつ面白くて聴き入ってしまいました。」(30代・女性)  
 「作曲家によって音色が違って聴こえました。」(70代・男性)  
 「色々なピアノの音が聴こえてきました。」(70代・男性)

- 「由香さんの演奏には、確固たる芯が感じられた。また、リズム感がとても優れている。」(60代・女性)  
 「楽しそうに演奏されているのが印象的だった。」(60代・男性)  
 「休憩時のコーヒーとケーキが振る舞われるのも魅力のひとつでした。」(30代・女性)  
 「内容が本格的で、曲が難しかった。」(50代・女性)  
 「激しい曲が多かった。」(30代・女性)  
 「もっと広い会場で聴きたかった。」(50代・女性)

これまで、「コンサートにトークを入れると芸術性が下がる。」「トークがあると演奏に集中できない。」といった声を演奏仲間から耳にしたことがあった。ところが、上記の感想から分かるように、トークで解説を加えたり、プログラムに写真を載せてイメージーションを喚起する方が、演奏者の意図や音楽そのものは、聴衆に伝わりやすいのである。演奏者が「伝えたい」とことと聴衆に「伝わる」ことは必ずしも一致しないため、演奏者は「伝える」工夫をしなければならない。

また、聴衆が音楽を理解するためには、感覚だけの受容では行き詰まる。旋律・和声・音楽形式を認識する能力が必要になってくる。そう考えると、音楽と思考を関係付ける働きかけが、さらなる音楽の理解に繋がると言える。これが感性的認識と理性的認識の融合である。

これらを土台に、教育現場においても、発想力、企画力そして実行力を用いる総合的な体験を積んでいきたい。

#### 5. 参考文献・引用文献

- 1) 茂木健一郎「すべては音楽から生まれる 脳とシューベルト」PHP新書 171頁 2008年
- 2) 西園芳信「学校音楽教育実践シリーズ4 音楽の授業における楽しさの仕組み」日本学校音楽教育実践学会編 音楽之友社 143頁 2003年

6. 参考資料



## 木下由香ピアノリサイタル

### ～ハンガリーを懐かしんで～

＜プロフィール＞

金沢市出身。金沢大学教育学部音楽科卒業後、同大学大学院教育学研究科音楽教育専攻（ピアノ）修了。加藤一郎氏に師事。大学院在学中、リスト音楽院マスターコースを受講し留学審査会に合格。1997年よりのハンガリー国立リスト音楽院ピアノ科にてイェネ・ヤンドー氏に師事。1999年第4回石川県新人登壇門コンサートにおいて、若成彰之指揮、オーグストラ・アンサンブル金沢と共に。2000年第2回リスト・バルトーク国際ピアノコンクール（ブダペスト）3位。ローマでの受賞審査員会に出演。2001年金沢市アートホールでリサイタル開催。2009年ハーモニホールらいでリサイタル開催。現在、広島女子短期大学幼児教育学科専任講師。日本ピアノ教育連盟会員。





2012年 6月15日(金)

【時 間】開演PM7:00  
【場 所】福井新聞社 風の森ホール

主催 福井新聞社 協賛 福井放送局

＜プログラム＞

ハイドン/ピアノソナタ第38番 へ長調 Hob.XVI: 23  
Haydn, Franz Joseph: Sonate für Klavier Nr.38 F-Dur Hob.XVI:23 Op.13-3

メンデルスゾーン/3つの練習曲 Op.104b  
Mendelssohn, Felix: 3 Etüden Op.104b

メンデルスゾーン/ ロンド・カプリチオーソ ホ長調 Op.14  
Mendelssohn, Felix: Rondo capriccioso E-Dur Op.14

ラヴェル/ラ・ヴァルス  
Ravel, Maurice: La valse



コダーイ/マロシュセーク舞曲  
Kodaly, Zoltan: Marosszeki tancok

バルトーク/15のハンガリー農民歌  
Bartok, Bela: 15 Magyar parasztdal

リスト/巡礼の年第2年補遺「ヴェネツィアとナポリ」より タランテラ  
Liszt, Franz: Annees de pelerinage Venezia e Napoli S.162/R.10 A197 "Tarantella"



＜曲目解説＞

◆ピアノソナタ第38番 へ長調 Hob.XVI: 23/ハイドン (1732-1809)

ハイドンは50曲以上のピアノソナタを作曲しており、このソナタは1773年に作曲されたハイドン中期の作品にあたる。

第1楽章 Allegro Moderato (アレグロ・モデラート)

ソナタ形式。リズムがこなれた主調。軽快に動く付随部。抑えるような第2主題など。演奏型だけでなく魅力的なテーマが次から次へと現れる。さらに、中間部では第7と第8の和音の連続するドラマティックな場面もあり、落ち着くことのない活潑な印象を与える。

第2楽章 Adagio (アダージョ)

2拍形式。シチリアーナ風で、とてもロマンティックな楽章。いくつかのテーマの間にカデンツを置いた趣向も現れ、即興的でロマン派らしい印象も与える。

第3楽章 Finale Presto (フィナーレ・プレスト)

ソナタ形式。得意気な進行で、調性やリズム・メロディーションを変化させるなどの工夫により、前回のテーマが貫き通して用いられている。この楽章も第1楽章同様、中間部では第7と第8の和音の連続が現れるなど、第1楽章との共通点が多いが、第3楽章の方がより展開が少なく、楽楽に書かれている。

◆3つの練習曲 Op.104b/メンデルスゾーン (1809-1847)

1834～36年に作曲された。

第1番 窓口指調 プレスト・センプレ・ピアノッシモ。分岐和音伴奏の中で主題を浮き立てる技巧を凝らした練習曲。

第2番 へ長調 アレグロ・コン・モート。終始一貫した分岐和音伴奏の練習曲。

第3番 へ長調 アレグロ・ヴィヴァーチェ。右手で和音、左手でアルペジオを弾き、音階的に置かれた主題旋律を浮き立てた趣向の練習曲。

◆ロンド・カプリチオーソ ホ長調 Op.14/メンデルスゾーン (1809-1847)

メンデルスゾーン15歳（1824年）の歳に作曲され、彼の作中で最も親しまれている曲の一つ。極めて濃厚なロマン主義の雰囲気と織り込まれた15の要素がある。ランタンテラ。4分24秒の導入部が次第に加速してプレストのロンド主題に流れ込む。未だ短く、8分の6拍子のロンド主題にはスケルツォ的なもどかしさや繰り返りももたせるリズム主題と無言歌風の主題の交互に置かれる。

◆ラ・ヴァルス/ラヴェル (1875-1937)

「ラ・ヴァルス」とは、フランス語でワルツの意。この曲は、ラヴェルが1906年に着想始め、1919-1920年にかけて完成された管弦楽曲である。その後の台ピアノ、ピアノ独奏用に編曲。初稿には次のようなラヴェル自身の練習がある。「滑らかに響く中から、ワルツを語るようなかすかに浮かび上がって来よう。音が次第に輝き上がる。A部において、滑らかに響いて来る必要のないダンス曲が現れ、そのリズムが少しずつ弱まっていく。B部のフォルティッシモでランタンテラの花がさきださぬ。1855年頃のオーストリア楽舞台である」

◆マロシュセーク舞曲/コダーイ (1882-1967)

マロシュセークは古い民間舞踊が大盛況に達しているトランシルヴァニア地方の一部。1927年に作曲され、その後1930年に管弦楽版が発表された。3つのエピソードとコーダを持つロンド構成である。曲中を驚くべき熱情的な主題が印象に残る。牧歌的な美しい導入部、軽快な舞曲、バロケスタイルのた踊りながら現れ、優雅に華やかに終わる。

◆15のハンガリー農民歌/バルトーク (1881-1945)

1914年から18年にかけて書き集められたもので、バルトークの民謡曲の中では重要な作品。個々の曲はどれもとても短いものだが、ハンガリーの農民たちの生活が感じられるような生き生きとした作品である。

1. 第1番～4番 4つの短い民謡
2. 第5番 スケルツォ
3. 第6番 バラード（テーマと変奏）
4. 第7番～15番 6曲 民謡

◆巡礼の年第2年補遺「ヴェネツィアとナポリ」より タランテラ/リスト (1811-1886)

この曲集は先の「巡礼の年第2年イタリア」と同時期の1837年から39年に作曲された。ヴェネツィアとナポリで耳にした楽壇からインスピレーションを受けている。タランテラはイタリアの民間舞踊で、劇団員のランタンテラに踊られた後この舞踏が舞踏家になるという言い伝えがある。舞臺の芝居がたまり、この舞踏の舞踏はカンツォーネがつかの間の癒しをもたらし、再び始まる繰り返り次第に盛り上がり繰り返す人々の様子を表している。